



# 病児・病後児保育室「愛あいルーム」だより

平成29年 7月発行

梅雨に入り、天気が変わりやすい時期になりました。体調管理に気をつけていきましょう。  
現在、「手足口病」「ヘルパンギーナ」の流行がみられています。

子どもの発疹は様々な病気に繋がっており、どの病気か決めて判断することが難しいものです。感染に伴う発疹では、発熱から始まるもの、発疹から始まるもの、おなかからでるもの、手足にできるものなど、病気によってことなります。今回は、子どもの発疹の原因と主な症状についてお知らせします。

## 発疹の原因と主な症状



### 1. ウイルス性全身疾患

ウイルスが感染して皮膚に発疹が出る病気としては、麻疹、水痘、突発性発疹症、手足口病のほかにもいろいろあります。風疹は「3日ばしか」ともいわれ、発熱、発疹と首のリンパ節がはれますが、症状は軽く3日で治ります。予防接種があるのは、妊婦さんに感染すると障害のある赤ちゃんが生まれるからです。りんご病はほっぺたがりんごのように赤くなり、手足にも淡いレース状の発疹が出ます。本人は元気で発疹の出ている時期はすでにもう感染力はないため、学校などはお休みしなくてかまわない病気ですが、妊婦さんに感染しないように注意が必要です。子どもの発疹に気がいたら、しっかりと症状や体調などを観察し、素人判断はさけて、かかりつけの小児科に行き、診断してもらうことをおすすめします。

・麻疹……………38度以上の高熱がでて、鼻水、目やに、せきといった風邪症状で始まります。発熱して3日ほどすると、口内に白い発疹(コブシク斑)がでます。このころ一時的に熱が下がりますが、再び熱が上がり、全身に淡紅色の発疹がでて、時間がたつにつれて濃くなります。うつろ力が強く、肺炎や脳症をおこすことがあるので、治るまで目はなせません。1歳になったら、7クチン接種で予防しましょう。



・水痘(水ぼうそう)・・・37～40度ぐらいの発熱とともに、水をもった赤い発疹が胸、お腹、背中、口の中から陰部、頭の中まで全身広がります。発疹は2～3日でピークになり、その後カサカサに乾き、黒いかさぶたになります。1週間ぐらいたって、全部がかさぶたになったら登園可能です。皮膚のかゆみをおさえるなどの対処療法が主ですが、発症直後に診断がつけば、抗ウイルス薬を用いて、症状を軽減できる場合があります。

・突発性発疹・・・2歳以下の乳児によくみられます。突然発熱し、下痢や熱性けいれんを伴うこともあります。高熱が3～4日くらい続き、熱が下がると点状～小豆ぐらいの赤い発疹が全身にできます。その他の症状がなく、元気があることが多いです。とくに治療しなくても自然に治り、発疹は3日ほどできえます。

・溶連菌感染症・・・溶連菌という細菌がのどに感染して、のどの痛み、熱、身体や手足の発疹などがでます。舌は、イチゴのようになります。検査で病名がはっきりしたら、抗菌薬を10～14日間飲みます。1日か2日で熱が下がり、のどの痛みも消えます。でも途中でやめてしまうと、再発します。指示通りに最後まで薬を飲むことが大切です。症状が改善した後も、2～3週間後に尿のなかに血液が混じっていないかを検査します。



<sup>ふうしん</sup>  
・**風疹(3日ばしか)**・・・発病してから2～3週間後に、赤くて小さな発疹が全身にできます。熱はまったくでない子から、3日間高熱が出る子どもまで、さまざまですが、いずれにしても3日で治ります。首や耳の後ろのリンパが腫れ、発熱や軽いせきが出ることもあります。麻疹と同様に、1歳になったらワクチン接種で予防しましょう。

・**いんご病**・・・左右の頬が赤くなり、1～2日後に腕や太ももに、まだらなレース状の赤い斑点まだら模様ができることもあります。熱はでませんが、大人がかかると微熱が、腰や膝が痛むことがあります。頬が赤くなったときは、すでにうつる時期を過ぎているので、登園してもかまいません。



「ヘルパンギーナ」が流行っています！！

乳幼児のあいだで流行する夏かぜの一種で、38～40度の熱が2～3日続きます。のどの奥に小さな水ぶくれができて痛いので、食べられなくなります。ひどい時は飲めなくなり、脱水症になることがあります。頭痛や嘔吐、腹痛など夏かぜの症状もみられます。熱が下がって口の痛みがなくなるまでは、休ませましょう。

「手足口病」が流行っています！！

手のひら・足の裏・おしり・ひざに赤い発疹ができます。口の中に痛みのある小さな発疹ができ、痛くて食べられなくなることもあります。熱はたいていありませんが、ときに高熱がでることもあります。口の中が痛くて水分をあまり飲まないとき、高い熱が続くとき、吐いてぐったりしているときなどは、もう一度診察をしましょう。



## 2. 皮膚感染症

皮膚は外界から身を守っています。とびひ(<sup>でんせんせいのかしん</sup>伝染性膿痂疹)は、黄色ブドウ球菌や連鎖球菌の感染で起こります。水疱がやぶけたような汁をもった疹が次々に増えていきます。抗生剤が有効ですが、掻かないようにしなければなりません。水いぼ(<sup>でんせんせいなんぞくしゅ</sup>伝染性軟属腫)はウイルス感染です。小さいいぼがこれもかくことで増えていきます。有効な塗り薬や飲み薬はなく、ピンセットでつまみ取るのが治療法です。ヘルペスウイルスもよく皮膚に感染します。小さな水疱が集合するような疹ですが、ぴりぴりする刺激感や痛みを伴います。これにはムピラックスという抗ウイルス剤の塗り薬、飲み薬、注射がよく効きます。いずれも、早めに見つけて対処しないとあっというまに広がります。

・とびひ(<sup>でんせんせいのかしん</sup>伝染性膿痂疹)・・・擦り傷や虫刺され、あせも、湿疹などに化膿菌が入りこんで水ぶくれができ、これをかきこわした手でほかの場所をかくと、そこにまた「とびひ」します。抗生剤が有効ですが、掻かないようにしなければなりません。感染力が強いので、うつらないようにタオルなどの共用は避けましょう。

・水いぼ(<sup>でんせんせいなんぞくしゅ</sup>伝染性軟属腫)・・・丸くて光った、うつる水いぼです。つぶすと白いかたまりが出てきます。この中にウイルスがたくさん含まれています。状況によっては、医師との相談のうえですることもあります。

・単純ヘルペス感染症・・・リンパ節が腫れ、直径1、2ミリの水疱が口の中や唇、外陰部などにかたまってできます。ほおの内側や舌に口内炎ができて痛み、歯肉炎を起こして出血することもあります。水疱やただれは二週間程度で消えます。このウイルスは症状が治まっても、体内に潜伏することがあり、風邪や疲労などで体調を崩したときに再発することがあります。



### 3. アレルギー性

湿疹をくいかえすのにはいろいろ原因がありますが、アレルギー素因がかかわっているのがアトピー性皮膚炎です。いろんなタイプの湿疹があるのですが、かゆいのが特徴です。じんましんは、蚊にさされたようなちいさなぶつから、広がって地図みたいにもりあがるものまでいろいろ。とてもかゆいです。食べ物や薬が原因のこともあります。多くは原因不明で、短期間でよくなります。抗アレルギー剤の飲み薬がよく効きます。

・アトピー性皮膚炎・・・アレルギーが関与していると考えられている皮膚疾患です。顔、手足の関節部分、足の付け根などに赤い小さなぶつぶつができ、じくじくしたり、かさかさしたいします。痒みを伴う場合もあります。原因になる物質や刺激がわかる場合は、それを避け、皮膚の清潔を心がけましょう。

・じんましん・・・蚊にさされたときのように、皮膚がモコモコと盛り上がり、とてもかゆがります。形も大きさもいろいろで、急にできて、たいてい1時間ぐらいで消えます。食物アレルギーや薬品アレルギーのほか、動物、植物、化粧品、寒さ、感染など、たくさんの原因があります。呼吸困難をおこすこともあり、

### 4. あせもと虫さされ



乳幼児の夏の2大皮膚トラブルは、あせもと虫さされです。

あせもは、よく額、首、肘の内側、膝のうらにできますので、まめにぬれタオルでふきましょう。赤ちゃんは腕や体にびっしりとあせもができることがあります。よくシャワーをしてください。

虫さされもひどくなると腫れて固くなり、掻いてとびひになります。虫さされの薬を使い、予防につとめましょう。

### 小児科か皮膚科？

発疹が出た時に受診するのは、皮膚科か小児科になります。どちらを受診すればいいのかわからない、迷うところですが、発熱と同時か、発熱後に発疹が出た場合は、小児科を受診しましょう。皮膚の症状が強い場合でも、最初は小児科へ連れていきましょう。咳、下痢、目の充血をともなっていたり、水疱があたり、口の中や全身にも広がっているときはうつる病気の可能性もあります。迷ったときにはまずかかりつけの小児科を受診することをおすすめします。

## これからの時期、**熱中症**に気をつけよう！

梅雨が明けると、日に日に日ざしが強くなり、心弾む夏がやってきます。夏の強い日ざしや、高温多湿の気候は、子どもの体に大きな負担がかかります。なかでも心配なのが、熱中症(熱射病・日射病)。周囲の大人が正しい知識を身につけて、暑い夏も、安全に楽しく過ごせるようにしていきましょう。

### 熱中症にならないために

- 外に出るときは、必ず帽子をかぶりましょう
- こまめな水分補給をおこないましょう
- 外に出る時間帯、長さを考慮しましょう
- 高温の室内や車の中での熱中症に注意しましょう



**絶対に、子どもをひとりにしないでください！**